

島大言語文化

島根大学法文学部紀要 言語文化学科編 第三十四号 抜刷
二〇一三年（平成二十五年）三月

訳注 『出雲名勝摘要』（二）

要木純一

訳注『出雲名勝摘要』(二)

要 木 純 一

○立久恵

いちらい しんききょう 立久恵 神門郡乙立村ニアリ。螺岩、烏帽子岩、猿岩、屏風岩、腰直岩等ノ巨岩聳立シテ、其高サ數十丈、幅凡ソ十町。老松古杉、媚ヲ獻シ、朝ニ水烟ヲ籠メテ、暮ニ雲雨ヲ籠ム。川ハ則チ神戸川ノ上流ニシテ、幅凡ソ二十間。一舟ヲ買フテ、流ニ溯レハ、其身ハ飄々乎トシテ塵世ノ外ニ出ツルヲ覺フ。

【訳】別名神亀峽。神門郡乙立村にある。螺岩、烏帽子岩、猿岩、屏風岩、腰直岩等の巨岩がそびえ立ち、その高さは数十丈（百数十メートル）、全長は十町（約一・一キロメートル）にわたる。老いた松、古びた杉は、風光明媚な様を見学者に提供し、溪谷は、朝には、川からのもやにおおわれ、暮れには、雲や雨におおわれる。この川は神戸川の上流であり、幅は二十間（約三・六メートル）。一艘の舟を雇って、流れを溯ると、その身は、ひらひらと漂うようになって、俗塵にまみれた世を抜け出たような気分になる。

【注】神亀―不思議で霊妙な亀。莊子・秋水「楚に神亀有り、死して已に三千歳なり矣」。神門郡乙立村―出雲国風土記の神門川の項に、「神門郡餘部里門立村」とある。門立（とたち。岩が門のように並び立つ様か）が訛って「おったち」に変わったらしい。現出雲市乙立町。螺岩・・・『簸川郡名勝誌』（鳥根県簸川郡私立教育会 一九〇八）の七一頁からの「神亀峽」の項に、螺岩、烏帽子岩、屏風岩、腰直岩等の名が見える。烏帽子岩、猿岩、屏風岩の名は現在も立久恵峽の案内板に書かれている。螺岩は、昭和十年（一九三五）に立久恵峽を訪れた野口雨情により作詞された「立久恵音頭」（作曲は春本早苗）に、「屏風岩から螺（ほら）岩かけて」と見える。（『定本 野口雨情全集』5（未来社）、

地方民謡（島根県篇）。老松―白居易・桐樹館重題「蕭疎たり老松の樹」。古杉―陸龜蒙に「和古杉三十韻」詩あり。日本では、老松古杉としばしば熟する。媚ヲ献ジ―本来はこびを売つて、人の歛心を買つてであるが、ここでは歡迎を受けること。風光明媚の感動を人に与えること。朱彝尊・揚雄論「乃ち劇秦美新の文を為つて以て媚を献ず」。籠―「こむ」と読んでいるが、「こめらる」の意であろう。覆われること。水煙―川から立ち上がるもや。梁簡文帝・登烽火楼「水煙岸に浮かびて起こり、遙禽霧を逐いて征く」。雲雨―宋玉・高唐賦序「巫山の神女が」且には朝雲と為り、暮には行雨と為る」を意識した措辞。神戸川―『出雲国風土記』の神門川。女龜山（めんがめやま）を発して北流し、琴引山のもとを通り、立久恵峽を経て、出雲平野を潤し、日本海に流れる。かつては神西湖に注いでいたのを、江戸時代に工事をして流路を変えた。中国山地の木を切り出すために、江戸時代引き舟等の河川交通が盛んであったと思われる。飄飄乎―軽やかで俗世を超越した様。蘇軾・前赤壁賦「飄飄乎として世を遺れて独立し、羽化して登仙するが如し」。塵世―俗世間。元稹・度門寺「心源は了了たりと雖も、塵世は憧憧たるに苦しむ」。寒山「更に塵世の外を觀る」。覚フ―古典文法に従えば、「覚ユ」とすべき所。

雨森老雨
あめのもりろう

使此勝与耶馬溪易地乎、海内第一之称、未必舍此而属彼。不幸僻在山陰疊嶂複嶺中。濟勝之士罕至。是其名之所以不甚著。士之抱才学而所居不得其地者、不亦然乎。雖然、天造地設、渾沌未闢、其不失太古真氣者、亦唯在此。不然、其不為羅漢寺者幾希。乃安知其為不幸者之適非其幸乎哉。此中消息難与不知者道。

【訓読】此の勝をして耶馬溪と地を易えしめん乎、海内第一之称、未だ必ずしも此を舍きて彼に属せざらん。不幸にして僻にして山陰疊嶂複嶺の中に在り。濟勝の士至ること罕なり。是れ其の名の甚しくは著れざる所以なり。士の才学を抱いて居る所の其の地を得ざる者も、亦た然らず乎。然りと雖も、天造り地設け、渾沌未だ闢かず、其の太古の真氣を失わざる者も、亦た唯だ此に在り。然らずんば、其の羅漢寺と為らざる者幾んど希ならん。乃ち安くんぞ其の不幸為る者の適ま其の幸に非ざるを知らん乎哉、此の中の消息は知らざる者の与に道い難し。

【訳】この名勝があゝの耶馬溪と場所を変えたなら、日本一の名が、こちらでなくてあちらになるとは限るまい。残念なことに、僻地で山陰の連峰のなかに埋もれてしまっているの、旅行者もまれにしかこない。これだけが、立久恵の名前がそれほど世に知られていない理由だ。志のある男子が学問をして、才能を持ちながら、その地位が、しかるべきものでない状況も、立久恵峽と同様であろうか。とはいえ、天地が創り出したままで、渾沌のまま開拓されることもなく、太古の真の氣韻を失っていないのも、まさに同じ理由によるのだろう。立久恵峽がこのような僻地でなければ、耶馬溪の羅漢寺のように有名にならなかつたことは殆どありえない。しかし、不幸であることがたまたま幸福であるということになるかもしれないではないか。このあたりの事情は、知らない人にはなかなか説明しにくいところである。

【注】使・平一仮定の気持ちを表す。「もし」と訓してもよい。耶馬溪―大分県中津市にある山国川の上・中流域及びその支流域を中心とした溪谷。頼山陽によつて称揚されて、全国的に有名になつた。易地―お互いに場所を換へること。孟子・離婁下「禹、稷、顔子は、地を易うれば則ち皆然らん」。海内第一―頼山陽・耶馬溪図巻記「之を海内第一と謂うも或いは誣いざる也」に基づく。真徳秀・史太師与通奉帖「薦進する所皆海内第一の流」。僻在―繁華な地から遠く離れたところにあること。杜甫・寒雨朝行視園樹「啼猿僻在楚山隅」。疊嶂―重なるみねみね。疊障にも作る。梁武帝・直石頭「朝雲疊嶂に生ず」。薛道衡・豫章行「前に瞻る疊障千重の阻むを」。孟浩然・經七里灘「疊障數百里、沿洄一趣に非ず」。複嶺―疊嶂と同意。胡曾・詠史詩・番禺「重岡複嶺勢は崔巍たり」。士一士大夫。中国では、学問によつて官僚になるのを目指す知識人というニュアンスが強いが、ここでも、単にさむらいとか一人前の男という意味ばかりでなく、明治維新後の新しい時代の中で何とか居場所を探そうとする学識ある旧藩士達を暗示するのである。才学―才能や学問。後漢書・宋弘伝「帝嘗て弘に通博の士を問う。弘乃ち沛国の桓譚才学洽く聞き、幾んど能く楊雄劉向父子に及ぶを薦む」。天造―天地の始まり。万物創造の時を指す。また、人為の加わらぬ自然のままのこと。易・屯「天造り草昧し」。班固・幽通賦「天造草昧、性命を立つ兮」。李白・酬殷明佐見贈五雲裘歌「毫を凝らし採掇す花露の容、幾年功成りて天造を奪う」。地設―田穎（唐）・問道堂後園記「向に辟する所の諸境を回思するに、幾んど天造り地設くるが若し」。樓鑰・揚州平山堂記「天造地設、人を待ちて而して発す」。混沌未闢―曹植・七啓「夫れ大

極の初、混沌未だ分かれず」。太古―上古。荀子・正論「太古は薄葬す」。真氣―まことの天地自然の元氣・エネルギー。論衡・乱竜「水火感動するは、常に真氣を以てす」。羅漢寺―耶馬溪にある曹洞宗の寺。五百羅漢で有名。前述の頼山陽・耶馬溪図巻記では、人工物のためか、それほど評価が高くない。「羅漢寺に至る。．．．五百像を安んず。余復た甚だしくは賞せず」。したがって、ここは、せめて羅漢寺程度の名声は得られたらうにというニュアンスか。なお、立久恵峽にも五百羅漢があるが、多くは大正以後のものだという。幾希―殆ど違いがないことを言う。孟子・離婁下「人の禽獸に異なる所以の者幾んど希なり」。この「異」を「不為」に置き換えた。韓愈「今天下吏部由りして而して仕進せざる者幾んど希なり矣」。此中消息―当事者以外にはわかりにくい微妙な事情。齊己・庚午歲九日作「此中の消息興何ぞ堪えん」。袁枚・隨園詩話「此中の消息、詩に深き者に非ざれば、知らざらん」。難与不知者道―柳宗元・与楊誨之疏解車義第二書「慎んで知らざる者の与（ため）に道う勿れ」。

17

釈道光

輕舟牽上峽雲西、環合奇峰望不齊。九曲溪流清且淺、幾多巖樹聳還低。歌謳更欲追朱子、応接恰同遊會稽。何日人間辭憤鬪、此中曳尾卜幽棲。

【訓読】輕舟牽きて上る峽雲の西、環合する奇峰望めば齊しからず。九曲の溪流清くして且つ浅く、幾多の巖樹聳えて還た低し。歌謳更に朱子を追わんと欲し、応接恰かも會稽に遊ぶに同じ。何れの日か人間に憤鬪を辭し、此の中に尾を曳きて幽棲を卜さん。

【訳】小舟を綱で引いて峽谷を上っていく、わきたつ雲の西の彼方まで。ぐるっと周りを囲む神秘的で奇妙な形をした峰々は、ぎざぎざとした稜線を見せている。ぐねぐねと曲がる溪流は清らかで浅い。岩に生えた沢山の木々が高くそびえたり、低くたれたりしながらずっと連なっている。興奮の余り、そのかみの朱買臣の故事にならって高歌放吟したくなる。すばらしい景色が次から次へとあらわれるのを出迎えるのは、王猷之が會稽の溪谷で遊んだ時もさぞかしこんな風だっただろう。いつか人間世界のごたごたを捨て去って、この立久恵峽に静かに隠居できる土地を選んで、亀が泥中

に尾を引きながらも殺されずに生きていくように、貧しく惨めでも、人間性を全うできる生活をすごしたいものだ。

【注】軽舟—小さく高速軽快な舟。国語・越語〔范蠡〕遂に軽舟に乗りて以て五湖に浮ぶ。軽舟といえ、李白・早発白帝城「兩岸の猿声啼き住まざるに、軽舟已に過ぐ万重の山」。峽雲—もともとは、主に三峽（長江中流域の巫山が浸蝕されて作られた大溪谷）の雲を指す。立久恵峽を三峽に比する気持ちがあるろう。宋玉・高唐賦は巫山の神女について、「且には朝雲と為り、暮れには行雨となる」と述べる。杜甫・送段功曹婦広州「峽雲樹を籠めて小なり」。陸游・寒食「峽雲日を烘りて已に霞に成る」。前注の李白・早発白帝城も三峽を下った情景を詠む。環合—ぐるっと周りを囲むこと。圍繞。柳宗元・至小丘西小石潭記「四面の竹樹は環合し、寂寥として人無し」。蘇轍・絶句其二「乱山環合して路無きかと疑う」。奇峰—伝陶淵明・四時「夏雲奇峰多し」。李白・江上望皖公山「奇峰奇雲を出す」。望不齊—稜線が一直線にならずぎざぎざである状態。厲鶚・汎舟鑑湖四首其一「雲樹參差として望めば齊しからず」。九曲—河流がくねくねと曲がること。王褒・九懷・危俊「九曲を歴て兮牽牛」。盧綸・送郭判官赴振武「黃河九曲して流れ、繚繞す古えの邊州」。溪流—山中の谷間の流れ。陸游・寄子虞「山色春寒淡く、溪流宿雨通ず」。清且淺—陶淵明・帰園田居其五「山澗清くして且つ淺し」。幾多—日本語の「いくた」と異なり、本来は「幾何」、「多少」と同じく、「どれほど」の意を表す疑問詞。感歎的に用いると、「どれほどか沢山の」というような、多量を強調するニュアンスになる。李商隱・代贈其二「総べて春山の眉を掃く黛を把りて、幾多の愁いを供え得たるかを知らず」。李煜・虞美人「君に問う能く幾多の愁え有らんかと。恰かも似たり一江の春水東に向いて流るるに」。巖樹—巨石上の木。寒山「巖樹青煙に舞う」。歌謳更欲追朱子—「朱子」は朱熹のことではなく、漢の政治家、官僚の朱買臣のこと。「覆水盆に返らず」の故事で有名。漢書・朱買臣伝によれば、「字は翁子、呉の人也。家貧しきも、読書を好み、産業を治めず、常に薪樵を艾し、売って以て食に給す。束薪を担い、行きて且つ書を誦す。其の妻も亦た負戴して相い随う。数ば買臣を止めて、道中に謳歌すること母からしむるも、買臣愈よ益す疾歌す。妻之を羞じて、去ることを求む」。「歌謳」は、この朱買臣伝では「謳歌」、同義。史記・張儀列伝「今將に上庸の地六縣を以て楚に賂いし、美人を以て楚を聘き、宮中の善く歌謳する者を以て媵と為さんとす」。応接恰同遊会稽—「応接」は出迎えること。人に限らず、自然や風景に対しても用いる。世

説新語・言語「王子敬（猷之）云う。山陰道上従り行けば、山川は自ら相い映発し、人をして応接するに暇あらざら使む。秋冬の際の若きは、尤も懐いを為し難し」。王猷之は東晋の書家。王羲之の子。会稽は、浙江省紹興の会稽山を中心とした地域。附近を流れる曹娥江は耶馬溪・立久恵峡同様の景勝地として有名。なお、朱買臣も会稽郡吳の人で、後に会稽太守となった。ただし、当時の会稽郡は吳（江蘇省蘇州）を含む広大な地域であり、朱買臣が、狹義の会稽の峡谷で「謳歌」したかどうかは不明。憤鬧―人間世界が混乱して騒がしいこと。百喻経・小児得歡喜丸喻「比丘も亦た爾り、衆務に在りて、憤鬧の処に少しき利養を貪ぼるを棄せば、煩惱の賊の為に、其の功德、戒宝、瓔珞を奪われん」。道光は、僧侶であるので、仏典の語を典故に用いたのである。曳尾―解説の「神亀」で引いた莊子・秋水の条に、「此の亀は寧ろ其れ死して骨を留めて而して貴きを為さん乎。寧ろ其れ生きて而して尾を塗中に曳かん乎」とあり、泥中に尾を曳く亀を、官界で身を犠牲にして出世するよりも、貧しくとも隠居して身を全うすることを選ぶ人の譬喩として用いた。ト幽棲―「幽棲」は静かで人里離れたすみか。王昌齡・過華陰「羈人幽棲に感ず」。また官界を離れて隠居すること。白居易・与僧智如夜話「幽棲漸く朋を得たり」。「ト」は「卜宅」。もともとは占いで住まいの場所を選ぶこと。歐陽脩・緱氏県作「便ち幽棲をトす」。

18

山村勉斎

突兀峡頭雲外歛、誰凶世有此神亀。崎嶇休嫌攀躋苦、猶勝塵塗不可隨。

【訓読】突兀たる峡頭は雲外に歛ち、誰か凶らん世に此の神亀有るとは。崎嶇たる嫌うを休めよ攀躋の苦しみを、猶お勝れり塵塗随う可からざるに。

【訳】急峻な峡谷が雲の向こうにそびえ立つ。こんな神々しい亀のような地形がこの世にあるとは誰が思うだろうか。ごつごつとした坂を上る苦勞をまあそういうやがりなさるな。俗塵にまみれた世間の道を歩むのに比べたら、まだまだだよ。

【注】山村勉斎―一八三六一―一九〇七。幕末明治時代の儒者。江戸で大沼枕山、塩谷岩陰に学び、帰郷して出雲広瀬藩

の藩校漢学所教授となる。明治七年修文館を創立し、のち島根師範講師をつとめた。名は良行。字は聞伯。通称は十郎。別号に半城。(『日本人名大辞典』) 突兀―高く聳える様。暈韻語。木華・海賦「魚は則ち横海の鯨、突兀として孤遊す」。盧照鄰・南陽公集序「突兀崢嶸たること、靈龜の孤朴に似たり」。峽頭―「頭」は「江頭」等と同じく、場所を示す接尾語。…のあたり。峽を二文字に引き伸ばした。文同・峰鉄峽「君見ずや峰鉄峽頭雲色死す」。崎嶇―山道が険しい様。双声語。張衡・南都賦「上は平衍として而して曠蕩、下は蒙籠として而して崎嶇」。元結・宿無為観「九疑山深きこと幾千里、峰谷崎嶇として人知らず」。嫌―山村勉斎の別集「勉斎詩集」では、嫌は厭に作る。平仄からいえば厭が正しい。攀躋―劉劭・人物志・体別「磊落動かすを休めよ。業は攀躋に在り、失は疏越に在り」。孟郊・和皇甫判官游琅琊溪「唯だ清宵夢に当たりて、髣髴として攀躋を願う」。高適・宋中遇林慮楊十七山人因而有別「歲暮一たび攀躋せん」。塵塗―ちりにまみれた道。世俗の道、生き方。王闔運・与盧生書「今復た塵途を契矩するも、旧轍を易えず」。

19

あやまてるえ
秋山光條

言卷(毛) 文(尔) 文(志支) 言卷(毛) 最(毛) 奇(志支) 白雲(毛) 立(毛) 及(婆須) 天津日(乃) 影(毛) 隠(呂比) 萬代(尔) 神佐備立(留) 立久恵(乃) 峯(乃) 巖群 千五百群 岩根撼 雷(乃) 音響似(弓) 落多藝知 瀧知流(留々) 琴引(乃) 美尾湖上 纜(乎) 松(乃) 下枝(尔) 打掛(弓) 遊(留) 今日(波) 現身(乃) 世(共) 覚(衣須) 薦枕 高天原(乃) 久方(乃) 天乃川原(尔) 何時来(尔) 気牟 大空(尔) 麗(礼留) 星(乃) 宿鴨 名(尔) 立久恵(乃) 峯(乃) 巖(波) 【読み下し文】 いはまくも あやにあやしき いはまくも もともくすしき しらくもも たちもおよはず あまつひのかげもかくろひ よろづよに かむさびたてる たちくゑのみねのいはむら ちいほむら いはねうごかし いかづちの とよもすにて おちたぎち たぎちながるることひきのみをさかのほり ともづなを まつのしづえに うちかけて あそべるけふは うつせみの よともおほえず こままくら たかまがはらの ひさかたの あめのかはらに いつかきにけむ

おほぞらに かかれるほしの やどりかも なにたちくゑの みねのいはほは

【訳】言葉では言い表せぬぐらいに、何とも不思議である。言葉では言い表せないぐらいに、たいへん神秘的である。白雲がわきたつても大岩に届きもしない。大岩によつて天の太陽の光も隠されてしまう。何万年も厳かに立ち続けている立久恵峡の峰の岩岩、一千五百を優に超えそうなそれらの岩を根元から揺るがして、雷が鳴り響くように、水は瀧となつてなだれ落ち、激しく泡立ち逆巻く。そのような琴引山への水脈を溯つていき、舟の纜を松の下の方の枝にかけて、遊んだ今日のひは、とても現実の世界とも思えない。高天原の天上世界にあるという、天の川原にいつ来たのであるうか、というような気持ちだ。

大空にかかった星座（天の河原）が、目の前にあらわれているのだろうか。名に「立」つ有名なこの「立」久恵峡の峰の大岩は。（まるで天上世界みたいだ）

【注】秋山光條―寒川神社宮司・国学者。一八四三―一九〇二。江戸出身。号は雪の舎。明治初年に神祇官の宣教使に任命され、国体の發揚・人心の鼓舞を目的として、日要新聞を刊行した。しかし、論議が激しくなつたために、官省の忌むところとなり発行停止となつた。その後、寒川神社宮司、出雲大社少宮司、三島大社宮司、八坂神社宮司を歴任。明治三五年には寒川神社宮司を命じられた。その所説は「忠孝一致」であり「神社の祭神は偉業をなした先祖であるために祭典を疎かにすべきではない」との見地に立つたもので「真心」を重視するものであつた。著書に『祝詞要義』、『祭文集』などがある。（國學院大學『和学者要覧』）明治十年ごろは、出雲大社少宮司として、大宮司千家尊福とともに、民衆の教化に努めた。千家尊福との共著に『福神像弁之概略』（出雲大社社務所 明治十年 国会図書館蔵）等がある。その『雪の舎歌文集』（明治三十八年 国会図書館蔵）の小伝によれば、『出雲紀行』なる著書があるようだが、未見。この和歌は、万葉風で、五七調の長歌と五七五七七の反歌から成り立つ。神官らしく、宣命体と万葉仮名を用いている。いはまくも―「いふ」の未然形＋意志の助動詞「む」の連体形＋場所・こと・場合をあらわす名詞「あく」＋係助詞「も」。言おうとする場合も、言語表現しようとするもの意。万葉集「かけまくもあやに恐（かしこ）くいはまくもゆゆしくあらむと」。あやに―言葉に表せないほど、なんとも不思議に。もとも―最も。なににもまして。くすしき―靈

妙だ。不思議だ。万葉集「くすしくも神さび居るかこれの水島」。たちもおよばず―雲がわきたつても届かない。「たちおよぶ」に感歎の気分を表す「も」が挿入された形。新葉集「月影や山の端遠くなりぬらむ麓の霧はたちも及ばず」。「たつもおよばず」の訓もありうるか。あまつひ―つ」は「の」に同じ。天の日。太陽。後伏見院「天つ日のひかりは清く照らす世に人の心のか曇れる」。かげもかくろひ―影は光の意。日光。明らかに、山部赤人「渡る日の影もかくろひ」を用いている。かむさびたてる―「かみさぶ」は「かみさびる」、「かんさびる」の古い形。「さびる」はそのものらしくなることだが、古くなる（鏗・寂）意もあり、古びて神と見まがうような世界を呈することを言う。「たつ」は「・・・しはじめる」の意か。万葉集「よろしなへかむさびたてり」。いはむら―岩石の群。万葉集「川上のゆついはむらに草むさず常にもがもなとこをとめて」。ちいほ―千五百の大和言葉だが、要するに数が極端に多いこと。古事記「吾一日に千五百の産屋立てむ」。いはね―岩根。どつしりと根を据えた大きな岩。いわがね。万葉集「白雲のたなびく山を岩根踏み越え隔（へな）りなば」。うごかし―万葉集「君待つと吾が恋ひをれば我が宿の簾動かし秋の風吹く」。忠岑「相思はぬ人の心は山なれやいわほよりけにうごかざるらむ」。「撼」は「ゆるがし」と訓じたかもしれない。いかづち―雷は万葉集では「いかづち」の訓。「大君は神にしませば天雲のいかづちのうへに庵するかも」とよまず―原文は「音響」。万葉集では、「響」一字で「とよむ」とよまず」と訓ずるようであるが、音が響くことであることを強調するために「音」字をつけたのであろう。万葉集「ほととぎすきなきとよまず（寸鳴令響）うのはなのともにやくしとはましものを」。日本書紀「遠方（をちかた）の浅野の雉（きぎし）とよまず我れは寝しかど人そとよまず」。おちたぎちたぎちちなる―「落ち滾つ」は、水が高い所から流れ落ちて、激しく泡立つ。万葉集「おちたぎち流るる水の岩に触れ淀める淀に月の影見ゆ」。「滾ち流る」は、水が激しくさかまき流れる。万葉集・紀鹿人「石走りたぎち流るる泊瀬川絶ゆることなくまたも来て見む」。琴引山―ことひき またことびき。立久恵峡のある神門川の上流にある。彌山（みせん）ともいう。出雲風土記・飯石「琴引山 郡家の正南卅五里二百歩なり。高さ三百丈、周り一十一里なり」。みをさかのぼり―「みを」は、滯・水脈・水尾。水の緒（すじみち）の意。海や川の中で、水の流れる筋。特に、船の航行できる深い水路。万葉「三輪山の山下とよみゆく水の水尾（みを）し絶えずは後も吾が妻」。

家持「堀江より水脈さかのぼる楫の音の間なくぞ奈良は恋しかりける」。崇徳院「はやせ川みをさかのぼるうかひ舟まづこの世にもいかがくるしき」。まつのしづえに「松の下の方の枝。古事記「上枝（ほつえ）は鳥居枯らし下枝（しづえ）は人取り枯らし」。蓮仲法師「住吉の松の下枝に神さびて緑に見ゆる朱（あけ）の玉垣」。ともづな「船尾をつなぎとめる綱。後拾遺集「筑紫舟まだともづなも解かなくにさし出づるものは涙なりけり」。うちかけて「ちよつと引っかける。憶良「船の舳（へ）に御手うち掛けて」。あそべるけふは「古今和歌六帖「春の野の浅茅が上に思ふどち遊べる今日は忘れめやは」。うつせみ「人間・世間・現世の意。枕詞として「世」、「世の人」などにかかる。万葉集「うつせみの世の人なれば」。こままくら「マコモを束ねて作った枕。特に、旅寝で即席の枕をいう。枕詞としては、薦枕が高いところから、「たか」にかかる。日本書紀「こままくら高橋過ぎ」。高天原「たかまがはら。また、たかまのはら。日本神話で、天照大神（あまてらすおおみかみ）をはじめ多くの神々が住んでいたとされる天上の世界。実朝「八百万四方の神達集まれり高天原にさき高くして」。ひさかたの「あま」の枕詞。あまのかはら「高天原にある天安河（あまのやすのかわ）の河原。天の川のことであろう。人麻呂「ひさかたの天の河原に八百万（やはよろづ）千万神の神集（かむつど）ひ」。いつかきにけむ「疑問なので、係助詞「か」を補って読んだ。業平「塩釜に何時か来にけむ朝風に釣りする舟はここに寄らなむ」。かかれる「麗」字は本来鹿が並ぶこと。引伸して、つらなる、かかる。易・離「日月天に麗（かか）る」。経信「久方の空にかかれる秋の月何れの里も鏡とぞ見る」。ほしのやどり「漢語「星宿」（中国の星座）を訓読みした語。経信「天の原ふりさけみれば七夕の星の宿りに霧たちわたる」。あるいは、星星が地上に降臨して「宿」つているという気持ちも兼ねているか。万代集「あやにくにしるくも月の宿るかな夜に紛れてと思ふ袂に」。なにたちく多の「名に立つ」は、評判になること。後撰集「名に立ちて伏見の里といふこともみぢを床に敷けばなりけり」。立久恵の「立」との掛詞。みねのいはは「一家隆」身を捨てばいづくか人の宿ならぬ谷の木陰も峰の巖も」。

20

谷川の けしきもそへて 立久恵の 山は舟より 見べかりけり
島重養

【訳】舟から、谷川の景色のすばらしさと一緒に、立久恵のやまやまは堪能するのがよいのだよ。

【注】そへて―山だけではなく谷川も趣があるという意。能宣「さやかなる月日も添へいとどしく光ぞまさる玉影の沢」。舟より―立久恵峡は、今と同じく徒歩で観光するのが一般だったのであろう。わざわざ舟をやとう（もしくは便乗する）粹狂。見べかりけり―風雅集「心こそやや清みまされ世の中を連れて月は見るべかりけり」。

21

川舟の もそろ／＼に のほりきて 立久恵山は 見るべかりけり
島多豆夫

【訳】川舟でゆっくりゆつくりと溪流をさかのぼって、立久恵山はみるべきである。

【注】島多豆夫―一八三二―一九二二。近代の歌人。出雲大社権宮司。杵築（現大社町）の出雲大社社家精茂の三男に産まれたが、大社上官で連歌の棟梁家をつとめる島家に入って、重養の養嗣子となる。明治五年（一八七二）神社改制によって出雲大社に出仕し、累進して権宮司に進んだ。島家は養父の重養及びその父重老ともに歌人の名を高めていたが、多豆夫も後を継いで和歌に天分を示した。明治三年頃、結社「正葩会」を創り、機関誌「類題正葩集」を刊行して、和歌の普及につとめた。参考文献Ⅱ『大社町史』（島根県歴史人物事典）。川舟のもそろ／＼に―出雲国風土記「河船のもそろもそろに、国来（くにこ）、国来と引き来縫へる国は」をそのまま用いた。風土記の国引き神話では、川舟のようにという譬喩であるが、ここでは実際に舟に乗っている。換骨奪胎の妙。『風土記』の言葉をつかうことによつて、太古から悠久の時を経た景勝の雰囲気を漂わせる。もそろもそろは、そろりそろりと。しずしずと。静かにゆるやかにするさま。

*島重養に同意しつつ、あわてずゆつくりと風景を楽しむべきことをも推奨して、あしらいの歌とした。

22 立久恵たちくゑの 腰こしのし岩いはわに のぼりてぞ 山やまのけしきは 見みおろされける
 武田道年

【訳】立久恵峡の腰のし岩に登ってこそ、山全体の景色は見おろすことができるのだ。

【注】立久恵の腰のし岩に―歩いて「立」ち通しで疲れ果て（「久恵（崩え）」たので、腰をのぼす（「のし（伸し）」或いは「なおし（直）」↓「のおし」↓「のし」という気持ち地名の裏にこめている。腰のし岩は、解説に見える腰直岩。のぼりてぞ―能因「足引きの山の高嶺に登りてぞ江夏の海は近く見えける」。山のけしきは―夫木抄「神無月山の景色はつれなくて時雨降り来る叢雲の里」。見おろされける―正徹「山たかみ見おろす谷の家家にともす光や螢そふらん」。

*鳥重養や鳥多豆夫が舟から仰いで山々をみることを推奨するのに対して、遠望を楽しむためには、高いところで立ち上がって腰をのぼして見おろすべきだ、と、ややふざけ気味に異を唱えたのだろう。（或いは、そう受け取られるように、編者の星野文淑や校閲社の中村守手が、配置したのかもしれない）

23 岩いはわ 畳たたみ た、みし世よより 立崩たちぶて 若わもしみらに 神かみさびぬらん
 北島三綱

【訳】岩が重なってこの岩畳ができた時代から、岩がそりたつたままでくずれてしまうほどの永劫の時間がすぎたので、そこに生えている苔も、その間中、同様に間断なく変化成長して、年を経たおごそかさともなうようになっていったのである。

【注】岩畳―岩が幾重にも重なっていること。万葉集「磐畳（いはたたみ）かしこき山と知りつつもあれは恐ふるか並ならなくに」た、みし―折りたたむようにして積み重ねる。何世代も重ねて、の気持ちも掛けるか。立崩て―「たち」は「たちまさる」など強調の接頭語としてよく使われるが、ここは「立ち往生」のごとく、岩が倒れずに立ったままの状態で、という気持ちであろう。「くゆ」は自動詞や行下二段活用。くずれる。こわれる。万葉集・大伴坂上郎女「愛

しとわが思ふ心早川の塞きに塞くともなほや崩(くえ)なむ」。立久恵峽の名の由来は「立杭」から来ているという説もある。ただし杭は「くひ」でハ行、「恵」は「ゑ」でワ行で、平安時代までは違ふ発音。いつから「立久恵」とよばれるようになったのたか、なお考究する必要がある。しみらに―終らに。たえずひっきりなしに。しめらに。万葉集「あかねさす昼はしみらにぬばたまの夜はすがらに眠(い)も寝ず」に。苔が、溪谷の水気に染みる、湿るの気分もあるか。神さびぬらむ―古びて神々しく見えること。続拾遺集「経りにける御垣に立てる松が枝に幾夜の風の神さびぬらむ」。「らん(らむ)」は、前に記したこと(太古より悠久の時間を経てたちくえたこと)が原因でそうなっているのだらう、という語気がある。

○小勝間松

松江ノ西北一里餘、名分村(島根郡)小勝間山ニアリ。其大サ一丈七尺餘、高サ十二間、右ニ転スル事十七間、左ニ廻クル事十九間。神代ノ老松ニシテ、枝ノ大サモ亦八尺ニ下ラス。其垂下シテ土ヲ穿チ、復タ躍リテ雲間ニ蟠マルモノ、大小合セテ十有三。鬱然ト独リ後凋ノ色ヲ呈シ、住吉高砂ノ諸松ト其名ヲ競ヒ、名士雅客ノ之レヲ訪フモノ多シ。然ルニ中世枯死シテ、高蹤ヲ隠クスヲ以テ、小松其跡ヲ襲キ、今ヤ亦朝ニ孤烟ヲ籠メ、夕ニ乱雲ヲ鎖サスト雖トモ、未タ昔時ノ風致ヲ見ル能ハス。惜イ哉。

【訳】松江から西北に一里あまり(約三・九キロメートル)ほど離れた名分村(島根郡)の小勝間山にあった。(言い伝えによれば)その太さは直径一丈七尺あまり(約五・二メートル)、高さ十二間(約二一・八メートル)、正面より右へぐるつと十七間(約三〇・九メートル)、左へぐるつと十九間(約三四・五メートル)。神話時代から長い時を経た松で、枝の太さも八尺(約二・四メートル)を越える。垂れ下がって地面を掘り、また上方に向かって、雲の間にグニヤグニヤと広がる枝は、大小合わせて十三本だったという。うっそうと茂って、他の木が枯れても枯れない、青々とした色をしめし、住吉や高砂の松達と、名声を争い、有名人や風雅を愛する旅人が多くここを尋ねた。ところが、かなり以前に枯れてしまい、そのすばらしさがあとをとどめなくなつたのを惜しんで、小さな松をその跡継ぎとして植え、かつてと同

様、朝にはそこだけでもやにつつまれ、夕べには乱れた雲に囲まれるほどに成長した。とはいえ、往事の風格を忍ぶにはまだまだ足りないのが、残念である。

【注】小勝間松—安達勝太郎『まぼろしの古跡 小勝間山』(一九九三)参照。ご恵与、ご教示頂いた安達喜久雄氏に感謝申し上げる。鳥根県立図書館にも所蔵。小勝間の松に関する歴代の文献や絵図・写真が収められている。この書にも引く、松江藩の地誌、黒沢長尚『雲陽誌』(一七一一)の「勝間神社」の項に「正哉吾勝(まさやわれかつ)の尊なりといふ。又庭鳥塚といへる。松一株あり。此の下に神代常世の長鳴鳥を埋めたりといふ。今も時により鳥の声するとなん。……水無瀬中納言の歌に おのづから国の魔はらふ勝魔山さか枝松を千代にちよふる」(訳注者により原文整理。水無瀬中納言及びその歌の原典は不明)とある。安達書によれば、初代は寛永三年に枯れ、二代は安永年間に枯れ、三代は「おのれ生え、明治四十四年暴風により倒れる」。四代は昭和六十一年頃松喰虫被害により枯れ、小勝間山も圃場整理のため取り壊され、今では平地の田圃となっている。したがって、この小勝間の松は三代目にあたることになり、『出雲名勝摘要』の挿絵と歌・解説は、明治初期の小勝間の松の様子を忍ぶ貴重な資料である。名分村—現松江市鹿島町名分。小勝間山—前注のように今では削られてなくなってしまうた。『出雲国風土記』に「加都麻社(かつまのやしる)」として名が見えるのがそれだとされる。中世には小勝間城という山城があったらしい。鬱然—鬱蒼に同じ。草木等が盛んに繁茂するさま。王讜・唐語林・補遺一「驪山の華清宮は天寶中に松柏を植う。巖谷に遍滿し、之を望めば鬱然たり」。後凋—後彫に同じ。論語・子罕「歳寒くして然る後に松柏の後れて彫むを知る也」に基づく。困難に耐えて固く節操をまもること。ここでは、原典通り、松がいつまでもみどりである様をいう。孟浩然・重酬李少府見贈「還た看る後凋の色、青翠松筠有り」。住吉、高砂—住吉は大阪市住吉区附近。高砂は兵庫県高砂市附近。古今集・仮名序「高砂、住の江(住吉のこと)の松もあひ生ひのやうにおぼえ」。以来、両地の松が、対で称せられることが多い。また『古今集』には興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」や詠人不知「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく世へぬらむ」等の歌も収められている。そして、これらの歌や文をモチーフにして作ったのが、世阿弥の能『高砂』である。名士—名望の高い人。広く気品ある風雅な有名人をさす。礼記・月令「季春之月、諸侯に勉め、名

士を聘し、賢者に礼す」。後漢書・方術伝論「漢世の所謂名士なる者、其の風流知る可し矣」。雅客―風雅な旅人の意。広く、詩文を好む文人をさす。「名士雅客」としばしば熟するがいつからか不詳。中世―時代区分ではなく、現在からある程度隔たった時代。中頃。高蹤―過去の立派な事蹟。漢書・揚雄伝上「五帝の遐跡を軼し兮、三皇の高蹤を躡む」。中国では、「高蹤」には、政治から距離を置いて引退する人をほめるニュアンスがあり、松が対象とはいえ、この「高蹤を隠す」という措辞も、それを意識している。漢書・蓋寛饒伝「君は遽（伯玉）氏の高蹤を惟わず、而して子胥の末行を慕う」。盧照鄰・初夏日幽莊「聞くならく高蹤の客有りて、耿介として幽莊に坐すと」。孤煙二籠メ―孟東野・嬋娟篇「竹は嬋娟として暁煙に籠めらる」。この「籠メ」も「籠められ」のつもりで使っているのだろう。「孤煙」は、遠方でそこだけ立っている煙やもや。陳子昂・金門饒東平序「遠樹は孤煙と色を共にす」。王維・使至塞上「大漠孤煙直く、長河落日円かなり」。乱雲二鎖ザス―程伊川・謝商守宋郎中寄到天柱山戸帖仍依元韻四首其四「一簇煙嵐乱雲に鎖さる」。この「鎖ザス」も「鎖さる」の意。風致―おもむき、品格。新唐書・崔遠傳「遠は、文有りて而して風致整峻なり」。「乱雲」はぐちやぐちやになつた雲。王筠・望夕霽「連山乱雲を捲く」。杜甫・对雪「乱雲薄暮に低る」。

24

小勝間こかつまの かけのたり尾おの しだり松まつ 神代かみよながらの 姿すがた成らなるん

細野安恭ほそのやすたか

【訳】小勝間山に埋められて、今も鳴き声が聞こえるという伝説の鶏、その鶏の長く垂れる尾のように、しだれている松は、神話時代そのままの姿なのであろうなあ。

【注】細野安恭―通称宮市。出雲広瀬家士。明治初年の人（『名家伝記資料集成』、『出雲国皇学者歌人学系略初篇』）。読みは『名家伝記資料集成』の振り仮名にしたがったが、「やすゆき」かもしれない。かけのたり尾の「かけ」は鶏（おそらく鳴き声が語源）。たり尾は、垂り尾。万葉集時代の「垂る」は四段活用。しだり松の序詞だが、先述の如く、『雲陽誌』に小勝間に常世長鳴鳥が埋められているという伝説があるのを意識しているのであろう。万葉集「庭つ鳥鶏（かけ）の垂尾（たりを）の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」。万葉集「あしひきの山鳥の尾の四垂尾（しだりを）の長々

し夜を独りかも寝む」しだり松―「しだる」と同義（四段活用）。枝が垂れた松。近世では「枝垂れる」の当て字を用いる。安達書によれば、近世では下り松と呼ばれていたらしい。解説にも、「垂下シテ土ヲ穿ツ」とある。神代ながらの―亀山殿七百首「言の葉に光を添へて玉津島神代ながらの道照らすらむ」。姿成るらん―「らん」は「らむ」。なぜそんなことに、というようにないぶかしむ気持ちがかめられている。「嘆く間に鏡の影ぞ変はりゆくこや絵に描ける姿なるらむ」。

25

松井言正

小勝間は みやも鳥居も なけれ共 松こそ神の しるし也けれ

【訳】風土記の時代勝間社があつたらしい、小勝間山には、今では、拝殿も鳥居もないけれども、この残つた松こそが神様の靈験あらたかな象徴なのだなあ。

【注】みや―御屋。本来は神を祭る建物。鳥居―とりいは太古からあつたようだが、ここは先に引いた『雲陽誌』の常世長鳴鳥を意識するか。常世長鳴鳥は『古事記』の天の岩戸の下りにもあらわれる。一説には、鳥居の起源はこの神話に関係するという。鳥居を詠む古歌は少ないようである。家隆「霜白き神の鳥居の朝がらす鳴く音寂しき冬の山本」しるし―象徴。神などの抽象的な概念が具体的にあらわれたもの。さらに、靈験、証拠の意にも広がる。家隆「風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける」。国信「葵てふ儂き草の名ばかりや神のしるしにかけてかへらむ」。資業「住吉の波にひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける」。神を待つ（松）気持ちになることこそが、神の存在のあかしだというような宗教的な哲理も籠められているか。

*定家「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」の興趣を意識するか。

26

武田道年

小勝間の 松はめぐしも 少女子よ なが家つとに いざといはなん

【訳】小勝間の松には心惹かれるなあ。(わが恋人の)少女よ、あなたの家への土産に、この松ぼっくりをさあ(持って帰ろう)とっておくれ。(私の愛を示すプレゼントとして受け取っておくれ)

【注】武田道年―既出。めぐし―愛し。いとおいしい、かわいらしいの意。万葉集「めこみればめぐしうつくし」。直接には松に対する愛情だが、少女に対する気持ちも掛けている。も―万葉調の詠嘆の終助詞。少女子―乙女子。少女。柿本集「須磨の浦にふなのりすらむをとめこが赤裳の裾に潮や満つらむ」。な―なんじ。あなた。家づと―つとは苞。わらなどを束ねて、その中に食品を包んだもの(わらづと)の原義から、広く土地の特産、土産物をさす。万葉集「家づとに貝そ拾(ひり)へる浜波はいやくしく高く寄すれど」。松の枝を土産にすることも考えられようが、松ぼっくりの方が少女の愛玩するにふさわしい。「かつま(勝間)」の原義が竹の籠(「玉勝間」等)ということも解釈に関係するかもしれない。いざ―さあ。「いざ」は別語。こは、伊勢物語「栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを」を意識する。なん―なむ。動詞の未然形に接続して、あつらえ望む意味を表す終助詞。・・・してほしい。

*全体に万葉集・雄略天皇「籠もよ美籠持ち堀串もよ美堀串持ちこの丘に菜摘ます児家聞かな名のらさね・・・」の気分を漂わせている。「松」に恋人を「まつ」意を掛けて、神代の風韻を備える松のもとに、古代風の求愛の場面を設定した。

本訳注は、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト 1003

山陰地域文学・歴史関係資料の研究(2010―2012年度) 代表 要木純一)

による成果の一部である。

